



欠陥品の文殊使いは 最強の希少職でした。3

Q L P H F L I G H T

登龍乃月
Toryuu no tsuki



アルファライト文庫

主な登場人物

Main Characters

クライシス

かつて世界を救った
伝説の大魔導師。本名は
クライスラー・ウインテッドボルト。
フィガロの魔素の影響で
若返った。

オルカ

ランシア自由冒険組合の
統括支部長。
義理人情に厚く、
荒くれ者にも慕われる。

シャルル

ランシア守護王国の王女。
刺客の襲撃に遭うも、
フィガロに命を救われる。

シャルル狐

シャルルが使役する
シキガミ。
人型にも変身可能。

クーガ

フィガロの力で
変異した魔獸。
高い知能と戦闘力を
併せ持つ。

フィガロ

本編の主人公。
魔法が使えず勘当されたものの、
クライシスのもとで
秘められた力に目覚める。

リッチモンド

二百年前に死亡し
アンデッド化した青年。
クライシスの魔法で
人間の姿を取り戻す。

冒險者として登録するため、俺——フィガロは、自由冒險組合ランチア支部所を訪れていた。
俺は、特例が認められ、剣技試験抜きで別室へ通された。
通された部屋は簡素な造りになつていて、石床やレンガで作られた壁が剥き出しになつていて。

俺は、特例が認められ、剣技試験抜きで別室へ通された。

て
し
る。

中央に事務机が置いてあり、机と向かい合わせに木製の椅子が四脚置いてあつた。

り、書類を睨んでいた。

「こ
ん
に
ち
は

「こんにちは、よろしくお願ひします」

俺が着席すると、青年は簡単な挨拶の後、自由冒険組合の規則や注意事項の説明を始めた。

低等級でいる間は、色々と細かい制限が多いらしい。

自分の実力をきちんと把握する必要性や、油断しているとモンスターに殺されてしまうという基本的な心構え。

また、個人的に受けた依頼は自由冒險組合の補償や優待などの対象外であることや、相応しくないと判断された場合は、等級の剥奪、降格もありえることなど。

駆け出しの冒險者にはありがたいお話だった。

他にも、冒險者には【八つの遵奉】という規律があり、それを遵守せよ、と言われた。

驕り高ぶるなれ

勇気と蛮勇を取り違えるなれ

弱者には手を差し伸べよ

正直であれ

名声を求めるなれ

冒險を敬愛せよ

未知への貪欲さを忘れるべからず

不要な殺戮は控えるべし

これらが【八つの遵奉】だった。

規則の説明を受けた後は登録の書類に記入した。そして、「良い冒險を」と事務官から鉛色に鈍く光る十等級のタグを受け取った。

簡単に整理すると、自由冒險組合には等級という制度がある。

十等級から一等級、一等級から上は、銀等級、白金等級、ミスリルに上がっていく。
一等級まではゴロゴロいて、銀等級、白金等級、ミスリル、と上がるにつれ、その数も減っていく。

そしてアダマンタイト、ヒビイロカネの冒險者はほとんど存在しない。伝説的、英雄的な強さを持ち、冒險者の頂にいる、皆の憧れのような存在らしい。

ランチア支部には銀等級、白金等級やミスリルこそ在籍しているものの、それ以上の境地に至る冒險者は、まだ一人も出ていないそうだ。
目安ではあるが、隣国で剣聖と呼ばれる人物——つまり俺の兄様、ルシウス・アルヴィンがヒビイロカネと同程度だと言われている。

一週間に一度、実技と面談による昇級試験が行われ、合格すれば一つ上の等級へ昇格す

る仕組みらしい。

自由冒險組合が斡旋する依頼は、大きく分けると討伐系と採集系の二つ。

討伐系は、害となるモンスターや異常繁殖してしまったモンスターを対象にする討伐依頼や、武具や装飾品、特殊な薬品などに使うモンスターの素材を集める狩猟依頼がある。採集系は、回復薬やその他一般薬の原料となる様々な薬草や植物を探したり、昆虫類や特殊な木材など依頼に応じた素材を集めたりする依頼が多い。

中には鉱山に潜り鉱石などを掘る、などの冒險者とは無縁そうな依頼もあり、その依頼の種類はかなり多岐にわたる。

聞くところによれば、採集系の依頼だけをやっていても生活には困らないのだそうで、それ専門のパーティもいるらしい。

基本的に自分の等級内であれば、どのような依頼を受けても構わないが、組合が危険だと判断した場合、人員追加を指示される事もあるんだとか。

これも冒險者の命を守る措置なのだろう。

人員追加を断つて無理やり依頼先へ行つた結果、無残にも全滅、というケースが多いため、基本的に断る冒險者はいないらしい。

命大事にってことだな。

帰つてくればまた行ける、帰れなければ……そこで人生が終わるのだから。

依頼を受け、そのモンスターから取れる素材や、依頼された品物以外の素材は、組合に併設されている素材管理部が、優先的に買い取つてくれる仕組みになっている。

素材にはランクがあり、高ランクの物は高値で取引されている。

その中で高品質と見なされるのは、状態のいい物や附加価値のある物、希少な物など。

剥ぎ取りで得られる素材は、剥ぎ取りの技術が問われるため、価格の変動が大きいそうだ。

依頼などでパーティを組みたい場合はどの職と組みたいか、条件、報酬の振り分けなど、細々した項目を申請書に記入し、組合の依頼掲示板に張り出せばいい。



「やあ、おかえりファイガロ。登録は無事終了したようだな。最後に、例の従魔を見せてもらいたいのだが」

冒險者としての説明を受けた後、俺は最初に案内された部屋に戻つてきていた。

どうやらこの部屋は、オルカ支部長の執務室兼私室になつていてるらしい。

天井の高さも部屋の広さ的にも、ここでクーガを出しても問題はなさそうだ。

「分かりました。では少し離れていてください、私の従魔は結構大きいので」「あい分かつた。ここらでいいかね？」

オルカ支部長は窓際まで下がり、広背筋を見せ付けながらボーリングをキメた。

「だ、大丈夫かと。クーガ、出てこい」

『オン！』

いつも通りに影の中から出てきたクーガは一度俺の周りをぐるりと回り、左隣に座つて落ち着いた。

『マスター、あの岩のモンスターは?』

「あの人は自由冒険組合の偉い人だ。礼儀正しくしような」

『は、マスターの仰せのままに』

『喋つた……? は……はは……こりやすごい……』

オルカはクーガの姿を目の当たりにするとボーリングをやめ、引きつった表情でクーガを見つめていた。

対してクーガは尻尾をゆっくりと床に打ち付けて、オルカの様子を窺つているようだった。

「なるほど……こいつは大した従魔だ……大きさもそうだが、貴様というか実力に裏打ちされた自信というか、大物感がすごいな……これでは私でも勝てるかどうか……ううむ……これほどの魔獸を使役するとは、さすがは陛下に認められた男という事だな」

呆気に取られた顔をしていたオルカだが、途中で腕を組み、値踏みするようにクーガの



体を眺め始めた。

「ありがとうございます。こいつは知能も高いですし、オルカ支部長に勝てるかどうかは分かりませんが、戦闘能力も高いです。ちなみに今連れているのはこのクーガだけなのですが、もう一体従魔がおりまして」

「何い!? そいつもこの従魔と同程度なのか!?

「あ、いえ、もう一体は小さいです。多分」

こう伝えておけば、王女であるシャルルの使用するシキガミを、俺のもう一体の従魔としてオルカは認識するだろう。

まだ、使役魔法の使い手であるアルピナからシキガミを借りる許可を得ていないが、ダメだつたらダメで、俺のバルムンクを見せねばいいだけだ。

「多分……? まあ出来れば今日連れてきて欲しかったのだがな……いないというなら仕方ない。よし、陛下の書面にある通り、従魔の使役を認めよう。ただし従魔専用の鎧と鞍をつけるようにしてくれ。そうすれば街中でも騎乗してかまわん。ルシオ君の所であれば取り扱つてているだろう。このランチアには従魔を使役する冒險者はいないから、特注にないだろうがな」

複雑な表情をしながらオルカが椅子に腰を下ろし、革張りの椅子はギシギシと悲鳴を上げてオルカの巨体を受け止める。

ゴーレムのような巨体が椅子にちょこんと納まる様は、少し可愛らしくも見えた。

しかし特注か……お金、どれくらい必要なんだろう。

「あの……つかぬ事をお聞きますが、特注だといくらぐらいかかるのでしょうか……?」

「うーむ。素材を全て自分で揃えるなら……鞍だけであれば金貨二枚くらいだと思うぞ? そこらへんはルシオ君と相談してみるといい」

「金貨二枚……ですか……」

「なあに十等級でも一週間ほど死ぬ気で依頼をこなせば金貨の一枚や二枚、容易い容易い!」

「はあ……分かりました……」

『鞍? とは何でしようかマスター』

俺とオルカが話している間、静かにしていたクーガが首を傾げながら尋ねてきた。

「移動用の獸に乗る場合につける、装具みたいなもんだよ。それがあれば街中を堂々と歩けるんだぞ? まあ俺を乗せている場合という限定条件だけだな」

『装具! この私にも装具をいただけるといふのですか!? 何という素晴らしい事か! 感謝の極みにござります!! ウオウ! ウオオオーラーン!』

俺の言葉が余程嬉しかったのか、何度も小刻みに遠吠えを繰り返して歓喜を表すクーガ。

最後に出した声は、先日王宮で出したものとはかけ離れた野太く雄々しい哮りだった。

尻尾ははち切れんばかりにグルングルンとすごい速度で回転。床に当たる度に、バタン

バタン！ と大きな音が鳴った。

その音に紛れてガタン、という音が鳴り、音がした方を向ければ、座っていたオルカが椅子を蹴り倒して、身構えているのが見えた。

「おいおい……思わず立つてしまつたが……フィガロ！ よつぼど嬉しかつたのか知らんが、クーガ君に少し限度つてものを教えてくれないか！ 威嚇などではないのだろうが、鬪氣がビンビン伝わってきて思わず身構えてしまつたぞ」

「す、すみません。おいクーガ！ 聞こえたろ！ 遠吠えをやめろ！」

「はっ！ 大変お見苦しいところをお見せいたしました。申し訳ございません」

「ふう……ありがとう、クーガ君。年甲斐もなく取り乱してしまつた。見苦しい姿を見せたのは私も同じだ、許してくれ。クーガ君は力のセーブというものを覚えるように。フィガロも同じだ。分かつたな？」

額の汗を拭う仕草をしながらオルカが言つた。

俺とクーガが頷いた直後、廊下から大勢の走る足音がこちらに向かっているのが聞こえた。

「支部長！ ご無事ですか！」

「オルカさん！」

「しぶちょおお！」

「支部長はん大丈夫かいな！」

「敵襲……？」

廊下を走る足音は見る見る大きくなり、声を荒らげながら、五人の男女が扉を蹴破るように入ってきた。男女は恐らく冒險者達のパーティだろう。

軽装備で身を固めている男や魔導師風の少女、ハンターラしき風体の女性などが皆それぞれに武器を持ち、血相を変えていた。

「なんだお前達！ この部屋には無断での入室を禁じているだろう！ それに武器など持ち出して何を考えているんだ！」

入ってきた五人の男女を、開口一番で怒鳴り付けるオルカ。俺とクーガは状況を掴めずに入り、呆気に取られてその光景を見ていた。

「な！ モンスター！？ どうしてこんな所に！」

「でつかい狼……！ こんなモンスター知らないわよ！」

「ただ座っているだけなのに……何だこの狼から感じるプレッシャーは！」

突然、慌ただしくなった室内でどうしていいか分からず、俺とクーガは状況を掴めず、「静かにしろ！ 驚々しい！ この狼はこの少年の従魔だ！ 武器をしまえ！」

オルカの怒号^{どごう}が飛び、飛び込んできた冒険者達はたじろぎながらも武器をしまう。だが目線はきつちりと俺とクーガに向けられていて、どうにも居心地^{じゆごうち}が悪い。

「突然遠吠えが聞こえたと思ったら、下の階までとんでもない殺氣^{はどき}のような波動^{はどつう}が流れ込んできたんだ。低等級の冒険者達なんて泡吹いて倒れちまつた！」

どうやらクーガのテンションを振り切った遠吠えが、階下でとんでもない事態^{じたい}を引き起こしてしまつたらしい。

クーガを横目で見ると、申し訳なさそうに耳を伏せて頃垂^{うなだ}れている。

力のセーブ、覚えような。

「今遠吠えはこのファイガロ君の従魔^{じゆま}、クーガ君が発したものだ。害はない、ちょっと力の加減^{かげん}を間違えただけだ」

「従魔……ですつて!?」

魔法使い風の少女が、驚愕^{きょうがく}しながら言つた。

「これが……従魔の放つ力のプレッシャーなのか……信じられない」

「でも綺麗^{きれい}な毛並み^{けだみ}……体毛の模様^{もよう}もエラ^{あら}いカツコええなあ」

「見てあの瞳、気高い魂^{たま}の輝きに満ち溢^{あふ}れているわ」

「あの丸太^{まるた}の^しような四肢^し、オルカ支部長^{おぶ}にも負けず劣らずの強^{きょう}韌^{じん}さに違いない」

「この少年がこの従魔の主ですつて？ まだ子供じやないの」

入口に陣取^{じんとり}つている冒険者達が、クーガを見た感想^{かんそう}を次々と口にする。いや、まあもう子供扱い^{こどり}されるのは慣れたからいいけどさ。

『マスター、あの女、マスターを子供扱いしております。囁^{ささ}み殺^{おんぶん}してもいいでしょ^{うか}』
「やめてくれ、不必要なトラブル起こしてどーすんだよ。ここは穩便^{おんびん}にいくんだ、元はとは^{いた}言えはお前が調子^{しらべ}に乗るからいけないんだぞ」

『ぬぐ……面目^{めんぱく}次第もございません……』

クーガが俺の耳にそつと口^{くち}を寄せ、物騒^{ぶつひき}な事を言い出したので少し強めに注意してしまつた。

それに成人していると言つても、まだ世間的に見れば子供だという事には変わりない。ましてや俺を子供と言つたのは、俺よりも一回りは年上^{おんじょう}そうなお姉さんだ。こればかりは致し方ないだろう。

「詳^{くわ}しいことは後で話す、今は下がれ。階下で倒れた者達の手助けをしてこい」

「だが支部長さん！」

「いいから行けと言つている！」

一際大きい怒号^{ひときわ}が飛ぶと、集まつた冒険者達は仕方なさそうに扉を閉めて出て行つた。

扉が閉まり切つて数秒の後、深いため息がオルカの口から出た。

「全く……クーガ君。力の加減を誤る^{あがま}るといったトラブルにもなりやすい。分かつてく

『理解いたしました。今後は気をつける所存です。マスターへもご迷惑をおかけしてしまったか?』

『申し訳ありませんでした』

『大丈夫、ちゃんとクーガに色々教えなかつた俺が悪いよ。そして申し訳ありませんでしたオルカ支部長』

『ここまでしょぼくれると、逆にこつちが悪いかのような錯覚に陥つてしまふ。』

『勢いよく振られていた尻尾も股の間にしまわれており、完全に意気消沈してしまつている。』

「うむ。あの冒険者達は、「ラナナム」白金等級の者達で、なかなかの熟達者達だ。ゆえにあのようない行動を取つてしまつたのだろう。仕方がないので許して欲しい。皆には私の方から説明しておくから、今後、こういつた事がないようにしてくれよ? だがまあ今回の件で、冒険者の中に従魔の遠吠えで気を失うレベルの輩が多いと分かつた。これは今一度、昇格試験などの見直しを考えるべきだな』

オルカは声のトーンを通常に戻し、諭すように言つてくれた。

『こうして、低等級とはいえ、冒険者達を遠吠え一発で失神に追い込んでしまつたクーガの、華々しいお披露目が終わつたのだつた。』

◇ ◇ ◇

騒動の後、オルカから解放された俺はクーガを影に入れて、階下の依頼掲示板の前に来ていた。

白金等級の冒険者に顔を知られてしまつたのと、遠吠えで失神者が出てしまつたという理由で、装具をつけるまでは組合内に入れる事を禁じられてしまつた。

他国と違い、従魔の存在が浸透していないランチアでは怖がる一般人もいるので、燈と鞍などの装具が出来るまでは外に出すな、とも言われた。

屋敷が拠点になると話したところ、庭先に出て、ご近所にクーガの顔を売つておけとも言われた。

そんなに神経質になるほどの事なのか? とも思つたが、とりあえずは言われた通りにするつもりだ。

この世界には獣人や亜人、巨人族などの別種族も存在するが、ランチアの街中でそう言つた人種を見かけるのは珍しく、そのほとんどが冒険者に身をやつしている。

冒険者の中にも従魔を使役する者はいないので、街中に大型のモンスターが闊歩するという事態がない。それゆえの処置なのだろう。

ランチア守護王国に在住するのには、ほぼほぼノーマル

かと言つて他種族に對しての差別用語や卑下する言動も見聞きした事がないし、少なからず他人種もいるので、通常人種至上主義というわけでもなさそつた。

「さてさて……何だかんだあつたけど、無事に十等級のタグももつたし、早速依頼を見てみよう。何があるかな……とりあえず飯食べたいから、サクッと串焼きが食べれるくらいのお仕事は……」

実のところ、起きてから今まで何も口にしていないのでお腹の虫が鳴りっぱなしなのだ。

先に依頼を受けてお腹を満たし、その後ルンオのいるタルタロス武具店へ。クーガの鎧と鞍の話をして、トワイライトに寄つてシキガミについての相談をする予定だ。

今後の予定を組みながら首元に揺れる、鉛色に鈍く光る小さいタグを指で弄び、依頼が張り出された掲示板に目を通す。

迷子の犬探し、人探し、どぶさらい、草むしり……散歩代行……なんだこれ？

十等級が受けられる依頼つて、こんなものしかないのか？

理想と現実のギャップに頬を引きつらせながら依頼書を見ていると、良さげな案件を見つけた。

「害虫駆除、か……対象は【ジャイアントクインビー】。これにするか？」

掲示板の下の方に張り出されていたそれを剥がして詳細に目を通す。

「屋敷の裏庭に巢食つたジャイアントクインビーを処理して欲しい……成功報酬は銀貨一枚。なお、巣にいると思われる幼虫の捕獲数だけ銅貨をプラス！？ これは熱いんじゃないか？ 銅貨一枚で串焼き一ダースは買える！ 銀貨一枚で銅貨十枚分だつたよな……うおおお！ 串焼きが百二十本も食えるぞ!! 冒険者万歳！」

依頼書を手に小躍りしつつ受付へと並ぶ。

今の時間は人が少ないのか、すぐに順番は回ってきた。

「あら、フィガロ様……さん……えつと、合格おめでとう、初仕事ね？ オルカ支部長から話は聞いているわ。詳しい事は教えてくれなかつたけど貴方のことは一介の冒険者として扱えと言われているわ。もちろん王家の書面を持っていた事は内密にしておけと厳命されているから安心してちようだい？」 さあさあそれじや……えつと……クインビーね、支部長いわく貴方、可愛い顔してミスリル以上の素質を持っているらしいじゃない？ 十等級から一等級までの仕事にに関しては、ソロでも問題ないと太鼓判を押されているわ。人員などは気にせず好きな依頼を受けて行つてね。ああ、もちろんその等級にあつたものじゃないとダメだけれどね？」

「あはは……ありがとうございます」

「はい！ 行つてまいりますお姉様！」

「やだ……お姉様だなんて……」

照れ臭そうにはにかむ受付嬢から依頼主の家までの地図をもらい、建物を出て意気揚々と道を歩く。

太陽は大空の頂点を過ぎ、だんだんと沈みかけている。

急いで依頼をこなせば閉店ギリギリにはタルタロス武具店に行けるだろう。

腹の虫がたまに鳴るが、気にせずに地図を頼りにすんすんと歩いていった。

今まででは分からなかつたが、往来する人々の中に冒険者の姿をちらほらと見かける事が多い。首元に揺れる等級タグがその証だ。

「思つたより出歩いているもんなんだな……」

冒険者だつて食事をするし、買い物もする、娯楽だつて楽しむ、考えてみれば当たり前のことなのだが、今では何事も新鮮に見えて楽しくて仕方がない。

こんにちはニューワールド、こんにちは冒険者。

「ここか……屋敷でつか……さすが伯爵家。何んまいが違うわな……」

テクテクと道を歩き、辿り着いたのは七区画にある伯爵家の前。俺の屋敷の倍はあるうかという敷地の広さ、敷地は全て堀で囲まれていて、中の様子は門からでしか分からぬ。アルワイン家は公爵位ではあつたけれど、家自体はそこまで大きくなかった。

それでも俺の屋敷よりかは大きかつたけれど、目の前に広がる伯爵家ほどではない。

「どうかしましたか？」

俺が門の前で立ち尽くしていると門番が怪訝な顔をして尋ねてきた。地図を持つて口を開けながら見上げている人が門の前にいたらそりや怪しむ。無理もない。

「はい、自由冒険組合から依頼を受けて来ましたフィガロと申します。ご依頼の件で伯爵様に御目通りをお願いしたいのですが、よろしいでしょうか？」

「なるほど。フィガロさんですね……ちょっと待つてください」

門番は門のそばにある小型の箱に向けて何かを喋っている。あれはアルワイン家にもあつた箱形の通信用魔道具で、短距離の即時通信を可能にする物だ。原理はウイスパーングと同じだ。

「お入りください。ご案内いたします」

「はい、お手数おかげしますがよろしくお願ひいたします」

中の人物に了承を得たのだろう。門番は門を開け、俺がくぐるとすぐに施錠して元の位

置へ戻った。

屋敷の方へ目を向けると、伯爵家の執事が屋敷からこちらに歩いてくるのが見えた。執事に屋敷の中へと案内され、ラウンジのソファへと通された。

「こちらでお待ちください」

室内は白と茶色で統一されており、家具や階段など、木で出来た物は全て無垢材で構成されていて主人のこだわりを感じさせる。ソファはやや柔らかめに作られており、長く座っていても疲れを感じさせない、上質な一品だという事が分かる。

「お待たせして申し訳ないフィガロ殿！ ちょっとバタバタしていたものでな。おい！ 何をしている！ フィガロ殿にお茶も出さんのか！」

おかしい。

なんだか俺を知つているような口ぶりだ。

伯爵であろう人物はちよび髭をはさうとした瘦躯の男性だが、俺の記憶にはない人物だった。自由冒險組合の、しかも十等級の相手にここまでするだろうか？

と俺が疑問に思つていたところで、メイドが紅茶を目の前のテーブルへ置いた。ふわりと漂う品のいい香りに思わず笑みがこぼれる。

「これは……カモミールの葉ですね……？」 とても上質な良い香りです」

「ほう！ フィガロ殿は茶葉にもお詳しいか！ あれほどの強さに加えてお茶を嗜む教養をお持ちとは……いやはや、うちの者が失礼いたしました」

あれほどの強さ……？

誰かと間違えているのではないだろうか。

「あ、いえ！ これはたまたま！」

汗が吹き出でてくるのを感じた。

「い、いえ……あの、メイド、つて」

伯爵の爆弾発言に、飲もうと口に含んだ紅茶を思い切り噴き出してしまった。

今、なんと言つた？ メイドと言つたか？

「おやおや、大丈夫ですか？」

吹き出してしまった紅茶をメイドが丁寧に拭き取ってくれるのを見ながら、背中に変な汗が吹き出でてくるのを感じた。

「祝勝。パーティの時ですよ！ 我らの危機に颶爽と立ち上がり、悪魔将軍に臆しもせずに挑む勇猛果敢さ。今思い出しても惚れ惚れいたしますな。ぜひうちの息子に、一度会つていただきたいものですよ。今はパートナーはいらっしゃるのですか？」

伯爵の一言一言に、汗が増していくのを感じる。

あの会場にいたのか……。

祝勝パーティには国の重鎮が多く呼ばれている、と俺についてくれたメイドのレミーが言つていたことを思い出す。

もはや、触れないで欲しい黒歴史を隠遁みされているような気分だ。しかも未だに、俺

が女だと思っているらしい。

「あ、あはは……ま、まあそんな事もあり、ありやんしたねえ！ あははは！ ほ、ほら！ そんな事より私やあジャイアントクインビーの処理が銀貨でそれがアレでございましてですね！？」

冷静に話そそうと思えば思うほど、口が離^{りはん}反して訳の分からぬ事を口走つていく。どうやら結構なメンタルブレイク具合らしい。

「はつはつは！ フイガロ殿は強く可愛らしい上に、教養とユーモアもお持ちの様子。フィガロ殿に、ジャイアントクインビーの始末のような難務はもつたいない。他の冒險者にやらせますので、どうでしょう？ 今晚あたりうちの息子も交えてお食事など」

この伯爵はダメだ。自由冒險組合の十等級冒險者としてじやなく、あの時のフィガロとしか俺を見ていない。

このままでは埒^{らち}が明かない。

ぐわんぐわんと揺れる視界の中で、必死に断るための言葉と言い訳を探す。

しかし俺の意思から離反した口は話すことも放棄したらしく、ただパクパクと動くのみだった。

「あの！ お誘いは大変嬉しいのですが、今晚はライゼン王に謁見^{えいみ}しなければならないので！ はい！ あと冒險者としての初仕事ですので、出来ればサクッとパパッと終わら

せたくですね！ はい！」

必死の思いで紡^{つむ}ぎ出した言葉は、ライゼン王の威を借りたなんとも中身のない言い訳だった。

「なんと……陛下との謁見がおありでしたか……それは残念です。であればぜひ別の機会にでも」

「はい、残念ですね！ ははは……」

「分かりました。依頼されたお仕事を^{かんすい}完遂^{かんそく}しようとするその心意気、しかと受け止めました。おい、フィガロ殿をあの場所へご案内するんだ。くれぐれも失礼のないようになんとか伯爵から解放され、裏庭へと案内された。

裏庭も敷地に比例してかなり広く、大きな池があつたり小さな果樹園のような場所も見受けられたりした。

「すごいですね」

「はい、伯爵様は庭いじりがお好きな方でして、果樹の剪定^{せんてい}なども自分で行つてているのですよ。先ほどお出したハーブティーのハーブも、この庭で栽培^{さいばい}されているのですよ？」

「そうなんですか？！ 自家栽培とは凝^こつてますね……」

クインビーの巣まではそれなりに距離があった。無言というのも気まずいので、庭に敷かれた砂利道を歩きながら、メイドと話をしてみる。

庭に植えられた木々や草花には管理が行き届いているようだ。

しつかりとトリミングされ、緻密な計算のもと配置された美しさは、王宮の花壇にも匹敵するのではないかと思ふ。

「伯爵様の育てるハーブは、王宮から取り立てされるほど高品質なんです。ですがご子息様は以前お見合いの話があつた際、伯爵様に庭のことなど庭師に任せればいい、と仰つていましてね。何ぶん園芸に興味のないご子息様ですか……私共としては、この素晴らしい庭を保持していきたいと思っているのですがね……血氣盛んなご子息様には、あまり価値のない物と見られているのでしょうか……」

伯爵は息子と折り合いが悪いのだろうか？

王宮に取り立てられるほどのハーブを生み出す庭なら、存続させる価値はあるんじやないだろうか。

確かに庭いじりは地味だし、若い男がやるようなイメージはない。

農園の息子なら分からぬでもないが、国の重鎮とも言える伯爵の息子だ、何か思うところがあるのだろうか？

「こちらです」

世間話に花が咲きかけた頃、目的の場所に着いた。

ジャイアントクインビーの巣の周りは簡易的な柵が設置されており、不用意に立ち入ることもある。

事がないように対策させていた。

巣の後ろには堀があり、堀に沿つて植えられた觀葉樹の幹を中心に行き届いていた。十メートルほどの横長の巣が形成されている。

依頼を受けた時は炎で燃やしてしまえばいいと考えていたのだが、今はこの愛がこもつた庭を少しでも傷付けないようにしたいと思つてゐる。

炎で焼くのは簡単だが、炎の余波で植物がダメになる可能性もある。

ジャイアントクインビーは一メートルほどの大きさの蜂型モンスターであり、比較的どこにでも巣を作る傾向がある。

巣は大きい物で五十メートル規模の物も確認された事がある。

個体が大きいため巣も大きくなるのだが、脅威なのはジャイアントクインビーではなく、クイーンを守るオス蜂で構成される軍隊蜂の存在なのだ。

成虫になつたオスの蜂は約七十分にもなる。

オス蜂は群れでの行動を基本とし、腹部にある鋭い針を武器として敵に襲いかかる。

ただのが大きい分、剣や盾で充分対処が可能ではある。

目の前にある巣は出来たばかりのようで、成虫の姿は見受けられるがほんの数匹程度であり、大した問題ではない。

巣の周りには伐採された跡があるので、発見当時は草や木に紛れていたのではないかと

思われる。

「ある程度の被害は伯爵様も容認されております。よろしくお願ひいたします」

「分かりました、少し後ろに下がつていてください」

巣の全体を視認した後、どうしようかと逡巡する。害虫駆除の基本は薬剤散布や焼却。

もし魔法で対処するのであれば広範囲に効力のある魔法が必要になつてくる。虫型モンスターの弱点属性は氷と火、火を使わないのなら氷の魔法一択しかない。

記憶の中の魔法事典から氷属性の魔法を取捨選択していく。

【フロストミスト】

結果、選択したのは半径二十メートルに氷の霧を発生させる魔法だつた。

これは氷の霧に呑まれたら最後、一気に対象を氷漬けにする魔法なのだが、今回は効果範囲をギリギリまで縮小して使用した。

イメージを強く固めれば範囲を狭める事だつて可能なのだ。

霧が晴れるとそこには氷漬けになつたクインビーの巣が露わになり、氷の影像のようになつっていた。巣の周辺で動く気配はない、どうやら成功のようだ。

「すごい……こんなあつという間に……」

メイドが感嘆の声を上げパチパチと小さく拍手をしてくれた。処理にかかつた時間は一分ほどだが、これでもすごいと言われるのはとても気持ちが良い。

だつた分、小さかつたので苦労もなかつたですよ」

屋敷に戻り、伯爵へ巣の処理完了の報を入れた。

氷漬けになつた巣に近寄り、背負つていた剣を巣に突き立てる。途端にそこから数条の亀裂が入り、バキバキと音を立てて巣は崩壊した。

「氷漬けになつた時点では生命活動は停止しているはずですが、念のため死骸は焼却炉にでも放り込んでおいてください。あとこれが確認出来た幼虫六十四匹全てです。巣が出来たて

だつた分、小さかつたので苦労もなかつたですよ」

碎いた巣から出てきた幼虫はメイドから籠を借りてその中に入れてある。

伯爵は床に置いた籠の中を覗き込み、幼虫の数を数えている。

「はい、確かに確認しました。ご苦労様です。しかし出来たてとはいえものの数分で片付けてしまつとは……さすが、としか言いようがありませんなあ！」はつはつは！ これが報酬です。幼虫の分の追加報酬も入れてあります。受け取つてください」

「ありがとうございます。ですが氷漬けの幼虫を何に使うのです？」

「はつは！ 博識なファイガロ殿でも知らぬでしょうか、蜂型のモンスターの幼虫は栄養満点、疲労回復や滋養強壮の効果があるのですよ。調理して食べたり漢方薬などにも使われたりしておるのですがね。氷漬けにするという発想はありませんでしたなあ。氷の中に閉じ込めれば腐敗もない、実に画期的だ」

ホクホク顔の伯爵は謝礼の袋を俺に手渡して、実に衝撃的な事を言つた。

虫を食べるなんていう発想は思いもよらなかつたが、どこかで聞いた事もあつたので、
愛想笑いだけを返しておいた。

袋を開けて確認すると、依頼料と追加報酬分がしつかりと入つていた。

「よろしかればどうです？ 今から軽くビーワームの料理など」

「い、いえ！ 興味はあるのですがこの後も予定がありますので！」

「そうですな！ フィガロ殿は多忙の身、冒險者になりたてゆえ、ですかな？ 応援しておりますぞ！ 何か困つたことがあればすぐに言つてください、私であればご助力いたしますのでな！」

「はい、ありがとうございます。では失礼します」

非常に残念そうな顔だつたが、固い握手を交わすと結構あつさりと解放してくれた。

お腹は空いているが、だからと言つて虫を食べる気にはなれない。

俺は伯爵の厚意に複雑な感謝を抱きながら、屋敷を後にした。



伯爵家を出てすぐ、腹の虫を黙らせるために串焼き屋さんへと猛ダッシュ。
記憶に残るあの香ばしい味に、知らず知らずのうちにヨダレが出てくる。

太陽は沈みかけ、街は黄昏色に染まつていて、家路につく学生らしき集団や疲れた顔の衛兵達の姿が見受けられる。街灯にも明かりが灯り、夜の帳が降りるのももう少しといったところである。

「すいません！ 串焼きください！」

「おう、いらっしゃい！ 元気いいねえ！ もうすぐ店じまいだ、安くするからいっぱい買つてつてくれ」

多くの店は黄昏時を過ぎると店を閉めてしまう。

遅くまでやつてゐる食事処もあるにはあるが、そういつた所はお酒処も兼ねていてありますのでマイマイ入りづらかった。

逆にトワイライトのようなお酒処は、黄昏時を過ぎてからお店が開く。

朝から働く人達と、その人達をねぎらう夜の世界。

この二つが上手に噛み合つて、ランチアの街は一日中活気づいてゐるのだ。

そして俺は、冒險者となつた記念と初依頼達成のお祝いを兼ねて、串焼き屋さんで貝の串焼きと鶏肉の串焼きを一ダースずつと、果実ジュースを購入してゐた。

串焼き屋さんの店主がおまけとして数種類の串焼きも一本ずつつけてくれたので、代金を支払つて小躍りしながら噴水広場へと赴いた。

街には一定間隔で噴水広場が設けられており、住人達の憩いの場となつてゐる。

タルタロス武具店は夜遅くまで店を開けている、と串焼き屋さんの店主に聞いたので、少し休憩することにしたのだ。

噴水広場に辿り着いた俺は空いているベンチに腰かけ、串焼きの詰まつた紙袋を広げた。むわっとした熱気と香ばしい香りが鼻腔いっぱいに広がり、思わず涎が垂れてしまふうになる。

「いつただつきまーす。あんぐ……んん！ やつはりおいひい……染みるうー」

貝の串焼きはピリ辛の味付けになつていてあつという間に一ダースを食べ切つてしまつた。

串焼きで渴いた喉を果実ジュースで潤すと、おまけでもらった串焼き達に手を伸ばし、道ゆく人々を眺めながら串焼きを口いっぱいに頬張つて、一囁み一囁み堪能していく。

「平和だなあ……」

子供連れの夫婦は噴水と戯れる子供を微笑ましく見ており、カップルと思しき冒險者はベンチに座り何やら話しかんでいる。

犬の散歩をする老人はひどく腰が曲がつており、犬の方が老人の歩幅に合わせて歩いている。

皆思い思いに道をゆき、思い思いに時間を過ごしている。

ついこの前、悪魔騒動やアンデッドの大襲撃があつたとは到底思えない平和さだつた。

いずれは俺がこの平和を守つていく立場になるなど、未だに実感が湧かない。そして道ゆく人々も、噴水広場のベンチに座つている俺がそのような存在だとは、夢にも思わないだろう。

じきにファイガロという名が「へんきあはく」として知れ渡る。

分不相応だとは思うけれど、次期国王となる前準備みたいなものなんだと思う。

「家名かあ……どんな名前にしよう……剣の名前も決めてないのにな……ていうかそもそもシャルルと結婚したら俺の家名はランチアになるんだよな？ 一時的な家名として考えれば気も樂か……どーしよ……」

平和であるのはいい事だ。

だが、戦争や冒険というバイオレンスでスリリングな世界もまた平和の裏に隠れている。世界に至る所で戦争が起き、冒険者が命を賭してモンスターと戦い、様々な人が命を散らしている。

アルワインは戦の家系でもあった。

ルシウス兄様やヴァルキュリア姉様だって戦っている。

優れた魔法力や知識は、何も安全なものにだけ使われるわけではないからだ。

ヴァルキュリア姉様が専門としている魔導技巧などの知識や技術は、国を守るため、発展させるだけに留まらず戦争に使われる事もある。

ヴエイロン皇國の至宝とまで言われるルシウス兄様の剣技は、戦闘方面に極振りされた力だ。

父様だつて領地を守るために他貴族への牽制や腹芸など様々な争いを経験しているはずだ。

そして俺にも、アルワイン家を追放されたと言つてもその血がなくなるわけではなく、しつかりと引き継がれている。

現に俺は冒險者という、平和とはかけ離れた世界に身を置くことにした。

そしてドライゼン王の跡を繼ぐという事は國を守るという事。

それはつまり世界の各国と向き合うという事。

出来る出来ないを考えてしまうが、俺がシャルルと結婚してしまえば出来る出来ない

じゃなく、やるしかなくなるのだ。

道ゆく人々を眺めながらそんな事を考える。

気付けば串焼きの袋は空になつており、果実ジュースも底をついていた。

日はとつぱりと沈み、街灯が闇を照らしている。

それでも街をゆく人々の様子は変わらず、様々な人々が道を往来している。

「考えても仕方ないな。そろそろ行こう」

空になつた紙袋と果実ジュースのカップをゴミ箱に投げ入れて、意識を切り替える。

◇ ◇ ◇

軽く伸びをして、満腹になつた腹を撫でながら、俺はタルタロス武具店へと足を向いた。

「はい、ご苦労様です。報酬がこちら銀貨二枚ね」

「ありがとうございます」

翌日、俺は朝から組合に行き、手頃で手軽な依頼を消化していた。

昨日タルタロス武具店に行き、クーガの鞍と鐙の制作依頼を出したところ、鞍と鐙以外の品物、頭絡や手綱などの一式も含めて金貨一枚でやってくれると言つてくれた。

通常の馬具一式を揃えるので大体金貨一枚ぐらいのお値段らしいのだが、やはりクーガの場合はサイズの問題があるので特注だそうだ。

なるべく丈夫な素材で作りたいと伝えたところ、それも了承した上でこのお値段である。

どうして安くしてくれるのかと聞いたら、どうやら俺の品物で新技術を試してデータなどを取りたいのだそ�だ。

代金は品物の受け渡し時に払う事になつた、数日もあれば出来るそ�なのでそれまでに金貨一枚を用意すればいい。

なので俺は金策をするべく、朝から依頼を受けて回っているのである。

夕方には王宮へ赴き、シャルルを迎えて行かないといけないからな。それにつまでも床で雑魚寝をするわけにもいかないのでベッドや家具、雑貨なども揃えていかねばならない。

屋敷に元々あつた家具類も屋敷同様に、なぜか復活を遂げて使える状態にあるのだけ

ど……やつぱり一人暮らしをするなら、自分で家具を揃えたくなるつてもんだ。

「これで銀貨十枚だから……金貨に両替しておくか」

組合の受付で報酬を受け取り、素材管理部のカウンターへ赴いた。

受付は依頼の受理や事務系などを主としており、両替は素材管理部の仕事だ。

両替は黄銅貨、青銅貨、銅貨、銀貨、金貨、王金貨のどれも対応してくれ、金貨を銅貨

と青銅貨に、などという細かい両替も可能だ。

金貨までは十枚で一枚という比率で両替出来るが、王金貨だけは金貨百枚で一枚となる。

朝一から山の頂上に生えている薬草の採取や、ランチア国領の外れにある村に行つて依頼された品物を届けたりと、合計四件の依頼を消化して大忙しだった。

移動は【フライ】で行つたので移動時間の短縮が出来てかなり楽だった。【フライ】がなければ四件も依頼をこなすのは不可能だったろうからな。本当に便利な魔法だよ、【フライ】様様だ。

【フライ】

報酬は合計で、銀貨五枚、銅貨一枚、青銅貨八枚、という感じ。

それに加えて昨日、伯爵家でもらつた報酬の残りを含めると、金貨一枚には充分。お金を稼ぐのは大変だ、とつくづく思った。

時刻はもう昼を過ぎて、あと数時間程度で太陽が沈み始める。

疲れはしなくとも汗はかく、朝から動き回つていて体中が汗でべトベトである。

一度屋敷に戻り風呂に入つてから出ないと、シャルルに汗臭いと思われてしまう。

【フライ】

組合の建物から出て裏手の路地に入つて【フライ】を発動、そのまま屋敷へと飛んで帰つた。

【フライ】で王宮へと向かつた。

「え？」

いつも通り橋のたもとからクーガに乗り、橋を越えると、王宮の扉の前には既に馬車が停まつており、兵士達が忙しく動いていた。

そこにはシャルルの執事であるタウルスの姿もあつた。

「一体何事だろうか。」「これはこれはフイガロ様」

「こんにちはタウルスさん、これは一体？」
 「はて？ 私達はシャルル様からトイガロ様と離宮へ赴くと言わわれているのです……そ
 の準備にござります」

「あー」

なるほど。

シャルルはトワイライトに行くのではなく、離宮に行くと言つて外出許可を取つたのだ
 ろう。

外に出で途中で行き先を変えるつもりなのだろうか？

「トイガロ！ クーガ！ 待つてたわよー！」

「シャルル！ なんだいたのか」

『待たせたようだなシャルルよ』

馬車の窓が開き、シャルルが手を振つてゐる。どうやら最初から中で待つてたようだ。
 「なんだじやないわよーもう。楽しみだつたんだから仕方ないじやない」

『ごめんごめん』

「さ、乗つて！ クーガはしばらく影でお留守番ね」

シャルルは満面の笑みで手招きをしてゐる。俺も馬車に乗らなければならぬらしい。
 クーガを影に戻し、王家の紋章が刻まれた馬車に乗り込む。

その際、鋭い視線を送つてくる騎士の姿が目に入つた。

王宮に入る扉の脇に赤い鎧の守護騎士が立つており、その騎士が物凄い形相で俺を睨み
 付けていたのだ。

「シャルル、あの人人は」

「彼は守護騎士の一人よ。あまりトイガロを良く思つてないみたいね」

「そうか……」

「気にしないでいいわよ。特に何かしてくるわけじゃないわ。むしろそんな事をすれば自
 分の立場が危ういと分かつてゐるはずだもの」

「分かった」

馬車に入り、馬車の扉が閉まつた事を確認して、さりげなく窓から守護騎士を盗み見る。

俺が馬車に入つたにもかかわらず、守護騎士の視線は変わらない。

守護騎士に恨まれるような事は何もしてないはずなのに……。気にするなど言われても
 気になつてしまふ。

その後、王家の馬車に揺られて約二十分。

俺はシャルルと共に、サーベイト森林公園内にある離宮へと来ていた。

王宮から離宮へは、王宮関係者しか通れない道で、壁がつており、通常の街道よりも早く
 着く。

立ち読みサンプル はここまで